

令和 5 年度事業報告



公益財団法人神津牧場

令和5年度事業報告

1. 庶務事項

- (1) 役員に関する事項（令和6年3月31日現在）
理事 11名、 監事3名
評議員 11名
- (2) 役員の異動
なし
- (3) 職員に関する事項（令和6年3月31日現在）
場長以下 職員 13名 臨時職員 3名
参与1名
- (3) 役員会等に関する事項
- イ. 令和5年6月5日(月) 14:00-15:00 **執行役員会** シルクセンター国際貿易観光会館会議室(横浜市中区山下町1番地) 6月6日開催予定の理事会および6月22日開催予定の評議員会の議題について
- ロ. 令和5年6月5日(月) 15:00-16:30 **監事会監査** シルクセンター国際貿易観光会館会議室 令和4年度事業報告及び収支に関する決算報告の監査
- ハ. 令和5年6月6日(火) 14:00-15:50 **令和5年度 第1回理事会** シルクセンター国際貿易観光会館会議室 令和4年度事業報告及び収支に関する決算報告ほか
- ニ. 令和5年6月22日(木) **令和5年度 第1回評議員会(書面会議)** 令和4年度事業報告及び収支に関する決算報告ほか
- ホ. 令和5年11月9日(木) 14:00-16:00 本部 **執行役員会**
11月16日開催予定の理事会の議題について
- ヘ. 令和5年11月16日(木) 14:00-15:30 **令和5年度第2回理事会**
シルクセンター国際貿易観光会館会議室 令和4年度中間事業報告ほかについて
- ト. 令和6年2月27日(火) 14:00-16:00 本部 **執行役員会**
3月1日開催予定の理事会および3月18日開催予定の評議員会の議題について
- チ. 令和6年3月1日(金) **令和5年度第3回理事会** シルクセンター国際貿易観光会館 令和6年度事業計画及び収支予算書ほか
- リ. 令和6年3月18日(月) **令和5年度第2回評議員会** シルクセンター国際貿易観光会館 令和6年度事業計画及び収支予算書ほか

2. 事業に関する事項

<一般経過報告>

神津牧場の地勢上の特徴は広大な森林と草地を持っていることである。この資源を土地利用型の畜産に活用し、更に重層的な多面的機能として顕在化させることにより、外部経済効果を併せて持続的に活用しようとするものである。土地利用型畜産としてはジャージー種牛の放牧利用を基本として、高付加価値の乳肉製品を生産・加工し、消費者に届けることである。ジャージー種牛の放牧で作り出される草原景観は多くの人にやすらぎと癒やしの空間を作り出す。ジャージー種牛とのふれあい体験や放牧景観を来場者に提供するだけでなく、近年では食の教育の場としても活用され、更に自然観察など教育の場としての深化を見せている。

生産の概況

本年も709個のロールベール(約400kg)を生産し、ジャージー種牛146頭を飼養し、63頭の経産牛から、356tonの生乳と66頭の仔牛を生産した。また、去勢牛肥育は6頭、経産牛は6頭を牛肉として利用した。この他、農家からの預託も4頭(4月21日から10月19日まで182日間)引き受けた。搾乳牛放牧は4月から11月まで、肥育素牛放牧は5月から12月まで行った。飼料情勢にもなまって、飼養頭数を極力少なくしているのがここ数年の傾向となっている。

これらの生乳から牛乳、バター、ソフトミックス、ヨーグルトを製造し、アイスクリームは委託製造している。年による品目間の変動はあるものの、概ねやや微増となっている。アイスクリームは委託製造先が製造をやめる予定であり、今後は懸念される。

新型コロナ後の経営環境

令和5年度は5月8日に新型コロナの防疫体制が5類に移行し、流行も収まりをみせたが、その後、9月、翌年2月にも流行が見られた。9月の流行ではお盆の帰省時に警告が出されたこともあり、来場者が少なく、売上もやや低調であったが、秋以降は大きな影響はなかった。

コロナによる消費者行動が回復する一方、ウクライナ戦争に端を発した飼料、原材料価格、ガソリンなどのエネルギー関連の価格が上昇している。飼料価格は2021年に比べ、1.2から1.4倍に高騰している。さらに、この傾向は円安の為替相場に引き継がれて、生産費の増加が顕著になった。こうした影響は各種の製品価格に連動しており、コストの上昇につながっている。コストの上昇を価格に転嫁できればよいが、乳製品は全般に過剰気味であることと牧場製品は高価格商品であることから価格転嫁が難しい状況でもある。2022年5月に7%程度の値上げを行ったが、今後予定される必要経費を充足するに至っていない。

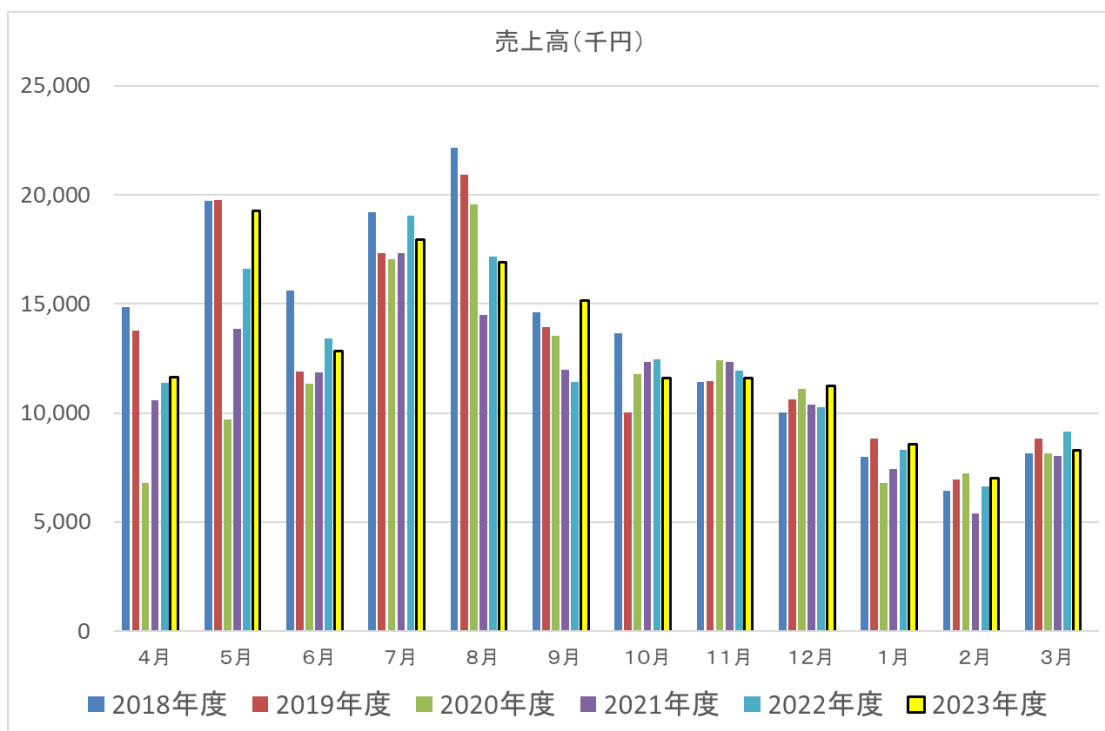


図 乳製品の払い下げ及び収益事業の売上合計

研修および研究連携ならびに体験等ふれあいおよび緑資源の活用

本年の研修生の受け入れはやや少なく3名にとどまった。研究連携は麻布大学野生動物研究室および農研機構鳥獣害研究者との連携研究を引き続き行った。

酪農・畜産の理解醸成、自然理解の深める牧場主催の親子牧場体験は牧場の家畜や自然とのふれあい、バター作りなどの畜産物の手作りなど盛りだくさんのプログラムで、好評であった。また、幼稚園や小学校の体験学習や移動教室も日帰りではあるが、都会では経験できない大型動物とのふれあいは貴重な経験となっている。本年も6回の親子牧場体験と小学校など726名の体験を受け入れた。

緑資源の活用として、NPO法人の自然観察イベントを受け入れた。また、これまで活用されてこなかった牧場内の天然林のJ-クレジット制度への検討を進めた。

地域連携

地域との連携は活動の成果を具体的なものとして提示する意味でも重要である。今年も、牧場主催の「花祭り」、「紅葉まつり」のイベントの他、世界遺産「荒船風穴」との連携企画、「下仁田ねぎまつり」、下仁田町「商工祭」、南牧村「農業祭」などに積極的に参加した。

運営上の課題

牧場では50年前に新設した多くの施設が老朽化しており、その更新が課題となってきた。このため、2017年に製酪工場の新設を行ったが、ロッジの宿泊施設、搾乳舎(搾乳システムを含む)、牛舎、トラクターなど事業の根幹となる施設の更新が喫緊の課題となっている。また、現在、地表水を取水しているが、近年の温暖化の影響から冬季に簡易水道の取水

が困難になる現象が起きている。地表水の取水は衛生上の観点からも好ましいものではなく、安定的な水源としては地下水からの取水は望ましいが莫大な費用が必要となる。その他、山林への過去の投棄物の処理などの課題が残っている。

＜公益事業 I：ジャージー種牛の放牧酪農経営における6次産業化モデルの構築に関わる調査・実証・研修事業＞

1) ジャージー種牛の飼養

(1) 草地管理及び飼料生産

本年度も5月下旬から1番草の収穫を開始した。春先の天候不順のため、1番草は234(280)ロールとなった。以下()内は前年度。となった。2番草は276(286)ロール、3番草は10月にずれ込んだが、196(145)ロールと回復した。このため、年間では前年度並みの709(711)ロールとなった。本年も峠3、峠4、は一番草のみ、切通、大畑、荻の平下、峠1は2番草までの収穫となり、後は放牧利用となった。2番草、3番草を収穫しなかったのは主としてシカによる食害である。シカの食害回避のため、環境省のシカ対策事業を牧場周辺で行うことを要請し、群馬県により平成17年から適正密度に抑える捕獲事業を行っている。報告書によれば本年度は9月17日から12月23日まで行われ、78(91)頭捕獲された。調査報告書では11月の捕獲とともに、春季(5月)の捕獲実施が提案されている。5月は牧草の生育が旺盛な時期でもあり、この時期の捕獲は被害軽減につながるのではないかと考えられる。粗飼料の不足分は稲ホールクロップサイレージと輸入乾草の購入で補っている。

(2) 放牧飼養技術の確立及び乳牛改良・種畜供給

本年も4月15日から昼間放牧を開始し、5月10日から夜間放牧を開始した。一方、秋期は前年同様11月8日より放牧地でのサイレージの給与を行いながら最終的には12月10日まで放牧を行った。肥育素牛牛群(雄の育成)、受託牛および育成牛群、搾乳牛群の放牧地の割り振りは変更なく、峠地区、桶萱地区、本場地区の放牧地を割り付けた。

年間総搾乳量は382(324)トンで、前年より18%増となった。搾乳牛率は平均8.9%であったが、6～11月と2月にはは目安の85%を下回った。飼料価格の高騰は著しく、前年比16%増となった。個体乳量は前年の16.2kg/日から16.8kg/日に微増した。

(3) 放牧受託(公共育成牧場)

受託育成牛は4月21日から10月19日まで182日間、例年通り受け入れた。本年は東京都からのジャージー種2頭とホルスタイン種2頭の計4頭であった。併せて、牧場牛6頭も放牧を行った。この間、牧場牛のDGは0.59kg/日(0.57)で、前年よりも良好であった。受託牛は0.71kg/日と非常に良かった。人工授精は受託牛3頭と牧場牛5頭に行い、8頭の妊娠が確認できた。

2) 畜産物の利用・加工技術の開発

(1) 乳製品の生産利用・加工技術の開発

神津牧場の特徴は放牧とジャージー牛という高品質でアニマルウェルフェアに配慮した

酪農とこれに基づく良質な乳製品の加工・販売までおこなうことにある。このことによって6次産業化による高付加価値を生み出している。

本年度もパック牛乳、ソフトクリーム、バター、チーズ、ヨーグルトなどで、それらの加工製造について、技術開発と製造を行っている。アイスクリームは牧場のレシピにより八ヶ岳中央農業実践大学校に委託している。しかし、需要は高いが、委託製造では需要に合わせた生産ができないという悩みがある。チーズはその品質を問うべく、2014年から国内のチーズコンテストに出品し、10回の入賞を果たしてきた(図参照)。本年度はALL JAPAN ナチュラルチーズコンテストに応募したが、残念ながら、受賞には至らなかった。日本草地畜産種子協会の放牧チーズフェスティバルに参加し、試食をしながら、消費者意見を聴取したところ、高い評価を得た。

神津牧場のチーズコンテスト受賞歴

製品名	大会名	部門	賞	主催者
神津さんしょう	JAPAN CHEESE AWARD 2022	非加熱・加熱圧縮/バラエティ部門	銀賞	日本チーズ協会
神津クリームチーズしょうが	JAPAN CHEESE AWARD 2022	フレッシュ/バラエティ部門	銅賞	日本チーズ協会
神津牧場チェダーチーズ	第13回ALL JAPAN ナチュラルチーズコンテスト(2021)	ハード熟成6ヶ月以上	優秀賞	中央酪農会議
神津牧場サラミケーゼ	第13回ALL JAPAN ナチュラルチーズコンテスト(2021)	ハード熟成6ヶ月以上	優秀賞	中央酪農会議
神津トマト&バジル	Japan cheese awards 2020	非加熱・加熱圧搾/バラエティ部門	No1	チーズプロフェッショナル協会
神津ゴーダ	Japan cheese awards 2020		銅賞	チーズプロフェッショナル協会
神津トマト&バジル	第12回 all Japan ナチュラルチーズコンテスト(2019)		優秀賞	中央酪農会議
神津下仁田ねぎ	Japan cheese awards 2018	非加熱圧搾・アクティブ(風味付加)部門	部門賞	チーズプロフェッショナル協会
神津チェダー	Japan cheese awards 2018	非加熱圧搾・熟成4ヶ月以上部門		チーズプロフェッショナル協会
神津ゴーダ	Japan cheese awards 2018	非加熱圧搾・熟成4ヶ月未満部門	銀賞	チーズプロフェッショナル協会
神津サラミケーゼ	Japan cheese awards 2014	非加熱圧搾・アディティブ部門	銀賞	チーズプロフェッショナル協会
神津モッツアレラ	Japan cheese awards 2014	パスタ・フィラータ部門		チーズプロフェッショナル協会

本年度の牛乳生産は85,596本（83,423本；103%）、バターは缶が3,916個（4,466個：88%）、瓶が3,774個（2,061個；183%）、ソフトミックスは52,290本（51,411本；102%）、ヨーグルトは大瓶が9,261本（9,221本；100%）、小瓶が77,272本（73,532本；105%）であった。缶バターが減少したが、代わりにビンバターが伸びた。他は微増した。牛乳は飲用だけでなく、菓子原料としての需要が伸びている。土産物店がお菓子の商品開発に使っているが、神津牧場産というブランドだけではなく、ジャージ牛乳独特の風味と品質が菓子の舌触りや味も評価しているものと思われる。こうした独特な品質の価値を顕在化させるため、バームクーヘンの委託製造を行ってきたが、消費者ニーズに合わせたミニサイズのバームクーヘンは好評を得ている。また、東京の有名ホテルとの牛乳取引、軽井沢の高級ホテルとのバターの取引も始まった。

（2）乳製品の卸販売

生乳は、牛乳として販売する他、バター、ソフトミックス、チーズ、アイスクリーム、ヨーグルトに加工し、農産物直売所、スーパー、デパート等への卸販売、牧場のロッジとミルクバーにおける直接販売、カタログ等による通信販売で販売している。

本年度の払下形態別の販売額のシェアを見ると、卸が76.1%（76.2%）、ロッジが16.0%（15.3%）、通信販売が7.8%（9.1%）となっており、卸販売が中心となっている。

また、品目別のシェアをみると、ソフトクリームが42.8%（41.5%）を占め、ついで牛乳が28.3%（27.3%）、ヨーグルトの10.8%（10.7%）、バターの10.1%（9.7%）とつづき、アイスクリームは0.9%、とチーズは4.5%であった。ソフトクリームはここ数年シェアが減少していたがやや持ち直した。アイスクリームは牧場のレシピで委託製造をしているが、委託先の都合により製造が不安定となっている。

（3）肉用肥育・加工

土地利用型の肥育として2シーズン放牧肥育方式を行っている。生後2年間粗飼料多給と放牧によって飼養し、その後4ヶ月の穀物肥育する赤身肉の牛肉生産するこの肥育は肥育期間が長期にわたることからコストが増加するため、一般的になっていない。しかし、放牧によるメリットはカルニチンやカルノシンといった機能性成分が増加し、さらに、最近では穀物肥育とは異なり $\omega 3$ （オメガスリー）脂肪酸が増加し、 $\omega 6/\omega 3$ の比率が理想的な2に近づくことが明らかとなっている。神津牧場ではこうした特徴を前面に出して、直接消費者に訴求することで差別化し、高額販売につなげることを目指している。

現在、鉄板焼コーナーや食堂での食材としての提供のほか、レトルトのカレー、ハヤシ、シチュー、煮込み、ドイツサラミ、ビーフジャーキー、ソーセージなどの加工品として販売している。これらの商品に対する評価は好ましいものであるが、放牧肥育を付加価値としての販売には至っていない。販売の仕方やマーケティングの検討が必要である。

（4）放牧養豚

群馬県では野生イノシシへの豚熱の発生が続いており、引き続き警戒が続けられている。このため、放牧養豚は前年に引き続き自粛した

3) 実習生・研修生の受入れおよび外部研究機関との共同研究

本年は研修希望が少なく、農業大学校1名、専門学校2名の計3名であったうち男性1名、女性2名であった。延べ64日（昨年163日）であった。コロナによる規制が解除され、研修受け入れ農場が増えたためと就職活動の一環として研修が減ったためと思われる。

共同研究は麻布大学野生動物研究室および農研機構の鳥獣害チームと行っている。麻布大学とは、牧場に生息する野生動物の生態研究の場として提供し、得られた成果を体験プログラムや牧場管理に利用している。農研機構とは多大な被害を及ぼしているシカについて長期に渡る動態調査や麻布大学との連携も含めて牧場管理に利用している。これらの成果は専門雑誌への投稿や学生の卒業論文及び修士論文として公表している。

<公益事業Ⅱ：牧場の持つ多面的機能の発揮促進事業>

(1) 牧場体験及び畜産理解醸成

近年、農と食の乖離が広がっているとの指摘がなされている。牧場での家畜との直接のふれあいは食に対する理解を具体的なものとして体験できる貴重な機会である。神津牧場ではこのような機会を提供すべく、牧場主催の「親子体験教室」を開催している。また、幼稚園、小中学校の移動教室や体験教室の積極的に受け入れている。さらに一般来場者にも家畜とのふれあいを体験するプログラムを提供している。

本年も牧場主催の親子牧場体験は宿泊人数を制限し、回数を5回から6回に増やして募集した。7月から10月まで行ったが、参加者は15家族57名（14家族 45名）であった。また、群馬県畜産協会主催で7月27、28日には親子牧場体験と同様の牧場体験を5家族12名（7名）で実施した。

小中学校及び団体での日帰りでの学習体験・見学は幼稚園1園（2）、小学校10校、726名（9校）、その他団体1団体、10名であった。

この他、一般来訪者を対象に、土曜、日曜日には乳絞り体験、山羊のお散歩、ポニー乗馬、牛追いツアーを行っている。親水公園の隣接部分に設置したドッグラン（無料）は多くの愛犬家に利用されて、集客の一助となっている。

(2) 緑資源の高度利用

牧場は農地としての草地、飼料畑だけではなく林や林をつなぐ緑地があり、林縁は特殊な植生を構成し、放牧地は糞虫をはじめとする独特な生態系を作り出している。牧場はこのようなモザイクに複合した生態環境を作り出しており、多様な生物の生活圏を提供し、生物多様性を高めている。このような緑資源を持っている神津牧場では家畜飼養による畜産生産機能と来場者へのふれあい体験機能、牧场景観を楽しむ保健休養機能が顕在化されているが、加えて、生物多様性保存機能も顕在化させ、自然教育にも活用することができる。

本年もNPO法人の「あーすわーむ」主催のSAVE JAPAN PROJECT（損保ジャパン）を2回にわたって開催した。また、麻布大学の野生動物実習は内山牧場キャンプ場の協力も得て、実施（8/22-25）した。

今後も自然環境の保全は重要なテーマとなっていくものと思われる。こうした機能を顕

在化させることが重要な牧場の役割となるであろう。そのため、牧場では約250haの天然林がある。生物多様性のみならず、CO₂の吸収源としての役割を評価し、CO₂の排出権取引の制度であるJ-クレジット制度への活用を図ることとしたが、昨年に引き続き、J-クレジットへの認定の可否等をさらに検討した。

(3) 情報発信と地域連携

牧場の活動を情報発信することは重要である。取材のあった放送、新聞、雑誌、書籍、は以下の通り。本年はやや少なかった。

- 8月18日酪農教育ファームの雑誌「感動通信」取材（10月5日発行）
- 10月4日NHK「鶴瓶に乾杯」撮影（下仁田町も紹介）（11月13日放送予定）
- 旅行ガイド：るるぶ等旅行ガイドほか数社

この他、地域との連携では多くの行事が開催された。牧場主催の「神津牧場花祭り」は観光協会と共催で、町役場、商工会などの協力により開催した。参加人数はおおよそ1500名で盛況であった。また、秋には「神津荒船もみじ祭」〈10月15日〉を行ったが、あいにくの雨天で、参加人数は250名程度にとどまった。

例年秋から冬にかけて行われている地域のイベントも今年は復活して、下仁田町商業祭、下仁田ねぎ祭り、南牧村農業祭に参加した。1月には日本草地畜産種子協会主催の「放牧畜産フェスティバル」にも参加した。しかし、群馬県の畜産フェスティバルは豚熱の影響で今年も中止となった。

<収益事業>

公益事業を支援する収益事業の柱はロッジでの売店や食堂、宿泊等の提供と「道の駅しもにた」の直営店「神津牧場ミルクバー」での販売である。と同時に、これらの直営事業は消費者と直接対峙することによる消費の反応や評価を見るうえで非常に重要な事業となっており、6次産業化モデルを考える上での情報をもたらしている。本年度も消費の回復が進んだことを示していると思われる。冬に行われたデパートの催事（スズラン本店：大群馬展（1/10-16）、高崎高島屋店：群馬展（1/17-23）、福田屋インターパーク：2/15-19）でも前年を上回る売上を示した。